



Title	〈野人〉は禁断の果実を食べたのか？：連環画等に見る〈野人〉の腰巻き問題
Author(s)	中根, 研一
Citation	連環画研究, 5, 64-83
Issue Date	2016-02-28
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98437
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98437
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_5_64-83.pdf



〈野人〉は禁断の果実を食べたのか？

——連環画等に見る〈野人〉の腰巻き問題

中根 研一

近頃日本に流行るもの

「安心して下さい、穿いてますよ！」

日本のお笑い芸人、「とにかく明るい安村」(芸名)の持ちネタは、股間に食い込むほどにピチピチなブーメランパンツ一丁の姿で、角度によっては全裸に見えるポーズをとり、その直後にパンツの着用を誇示しながら上記のセリフを言い放つというものだ。他愛もないギャグだが、これが2015年の日本で大ヒットした。全裸であればもちろんテレビでは放送できないし、舞台でもNGだろう。そのギリギリのラインをついた、まさに身体を張ったネタである。

近年アニメ化・実写映画化され、日本内外で人気の高い諫山創の漫画『進撃の巨人』では、劇中に人間を喰らう巨人たちが大量に登場する。彼らは例外なく全裸であり、外見は普通の人間とさほど変わらないところが余計に不気味なのだが、設定上「生殖器がない」とされている点が特徴である。当然、ないものは漫画でも描かれない。もちろん、この設定には作劇上の意図があつてのことだとは思うが、結果的に股間にベタスミやモザイクといった処理をすることなく、少年誌にそのまま巨人の全裸像を掲載することを可能にしている。2015年の実写映画化の際も、特殊メイクを施した人間が巨人を演じているが、股間部分には何もない。

「とにかく明るい安村」にしても、『進撃の巨人』にしても、テレビや漫画、映画という公の場所で表現される以上、ありのままの姿を見せるわけにはいかない。特に子供も見るとなると時間帯のバラエティ番組や、漫画といった場ではなおさらである。

——それが「人間」の股間であれば、だが……。

では、「人とサルの間」ともいわれる、謎の未確認動物〈野人〉¹の場合はどうだろう？

そこで本稿では、中国の連環画における「〈野人〉の裸」、今回は特に「男の〈野人〉の下腹部」の描かれ方に注目しつつ、少し考えてみることにする。なお、本稿では〈野人〉が実在するか否かは問わない。取り上げるのは、あくまで、中国人によって思い描かれた〈野人〉像である。

『クレヨンしんちゃん』の定番ギャグのひとつに、主人公のしんちゃんが股間を露出し、「ぞ～うさん、ぞ～うさん」とブラブラさせるものがある。アニメ版が中国でも人気のある同作だが、中国でのテレビ放送の際には絶妙なトリミング加工で、しんちゃんの下腹部はカットされてしまっている。こと、子供番組における規制²の厳しい現代中国において、〈野人〉の下腹部描写やいかに……。

初期の創作に見える〈野人〉イラスト

未確認動物〈野人〉の形象については、拙稿³でこれまでも紹介してきた。今回は創作の中に描かれた図像を中心に見ていくため、いわゆる「目撃談」を再現した〈野人〉像の詳細についてはそちらに譲ることにしたいが、騒動の最中である 1979 年に初めて世に発表された〈野人〉イラストを、一枚だけ載せておく【図版 1】。

これは、〈野人〉騒動（1970 年代半ば～）の最初期から現地調査をおこなった劉民壯（当時、上海師範大学在籍の生物学者）が、自身で収集した膨大な資料を元に復元した〈野人〉の想像図⁴であり、その後マスコミ報道や関連書籍で繰り返し引用されることとなる、いわば〈野人〉の定番図像である⁵。全身に体毛がビッシリと生え、長髪で前傾姿勢。右手で髪をかき上げながら、ニタッと笑っている場合が多い。

何も身に付けてはいないが、左足を前に踏み出しているため股間は死角となっている。

その後、〈野人〉をテーマにした小説や漫画が数多く世に出たが、そこに描かれる〈野人〉像も、おおむねこの劉民壯イラストから大きくはみ出すものではない。

おそらく最も早い現代〈野人〉小説の挿絵は、童恩正の SF 小説集『世界最高峰上的奇跡』（少年儿童出版社、1979）収録の「雪山魔笛」⁶に付けられた一枚であろう

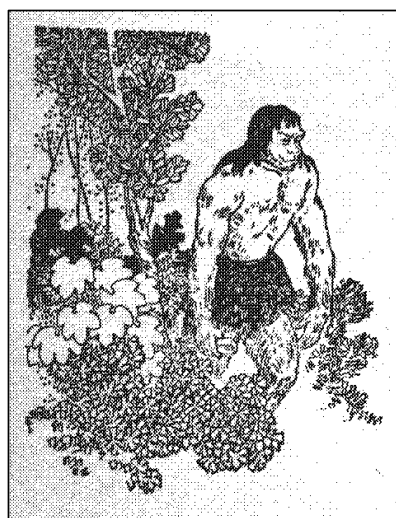
【図版 2】。同作の場合、厳密にはヒマラヤの雪男がモデルになっているが、その作中の扱いや身体描写は、当時の〈野人〉観にのっとったものであることは、すでに拙稿⁷で考察した通りである。原作の記述通りに「一片の熊皮」を腰に巻き、石器を手にして登場する。体毛もあるが、特に目立つのは伸び放題の長い髪であろう。

全体的に先の劉民壯のイラストに似ているが、大きく違うのはやはり腰巻きをつけているという点である。もちろん原作に忠実に描いたらこうなるのであるが、では、なぜそれは必要とされたのだろうか？

その後に発行された二種類の連環画版『雪山魔笛』に描かれた〈野人〉像も、改めて見てみよう。



【図版 1】劉民壯による再現図



【図版 2】「雪山魔笛」小説挿絵



63. 它越走越近，大家就越看越清楚了：它的身躯十分强壮，全身茸毛，两臂很长，脚却很短，而且微微弯曲。它围着一块熊皮，一手持着一块拳头大石制的刮刮器。

【図版 3】同連環画（福建版）

原作のテーマ（サルから人類への進化過程にある〈野人〉発見の意義）に忠実な福建人民出版社版（鄭子銘改編／翁開恩・方金河絵、1980）では、〈野人〉の描写も原文どおりで、北京原人の想像図に近い姿で現れている【図版 3】。熊皮と思われる腰巻きもある、一方、遼寧美術出版社版（曉棠改編／王弘力絵、1980）では原作のテーマが薄まり、世界を騒がせる未確認動物「ヒマラヤの雪男」イメージがそのまま投影されたものであった【図版 4】。毛むくじゃらゆえに、大事なところを隠す必要のない類人猿タイプなのがわかる。その体毛自体が、物理的な攻撃や他人の視線から股間を保護する役目を持っているのである。

連環画の中の〈野人〉たちの腰巻きの有無の境界線のひとつには、体毛の量の問題（ひいては進化の度合いの問題）も大きく絡んでいそうである。

想像の産物たる〈野人〉を、創作物の中で描く際、このように「腰巻きを身に着けている」タイプと、「何も穿いていない」タイプの二種類が存在する。描き手たちは〈野人〉に対し、どのような場合に何も穿かせず、どのような場合に何かを穿かせるのだろうか。以下、現在まで連環画や漫画、挿し絵等で描かれてきた〈野人〉像を概観してみよう。

穿いていない〈野人〉たち～剛毛やポーズで隠す工夫

1981年に発足したアマチュアの〈野人〉研究組織、「中国〈野人〉考察研究会」（以後、野考会）が、その研究成果などをまとめて発行した機関紙『野人探奇』創刊号（1985）の表紙には、長髪で毛むくじゃら、大きな乳房を持つ女〈野人〉が描かれている【図版 5】。本稿では基本的に「男の〈野人〉の股間描写問題」を扱っているが、このタイプの〈野人〉画は好んで描かれる題材でもあり、敢えて触れておきたい。これも、先に見た劉民壮作成のモンタージュイラストの流れを汲むもので、何も衣類は身につけていない。ただし、その胸の片方は長い髪によって控えめに覆われ、また股間部分にはちょうど左手が重なり、肝心な部分はガードされた状態となっている。

連環画『雪人的秘密』（張萍文・韓植墨絵、山西人民出版社、1982）に出てくるのは、ヒマラヤの雪男だが、頭頂部が鋭角的な毛むくじゃらの類人猿タイプ。衣類はない【図版 6】。股間の部位が隠れるほどに毛むくじゃらなのだが、



【図版 4】同連環画（遼寧版）



【図版 5】『野人探奇』創刊号表紙

同作では濃い陰影を多用し、全体を通じて股間部分を常に黒く塗りつぶしているのが特徴だ。

雑誌『奥秘画冊』（雲南省科普美術攝影協会、1983年第5期）掲載の読み切り漫画「野人！？」

（懿之・明達編／譚小勇絵）は、野考会が採取した目撃談を再現したという実録風漫画だ。そこに登場する〈野人〉は馬に乗りこなすなど、かなりの知能が見て取れるが、やはり何も身にまもっていない。そして同作の場合も、股間部分は黒い影で覆っているほか、たとえば草原の草によって絶妙な隠し方をしたりもしている【図版7】。

〈野人〉と人間との恋愛（？）や婚姻を描いたアンソロジー小説集『野人求偶記』（紫楓編、中国民間文芸出版社、1988）の表紙に描かれた〈野人〉は屈強な類人猿タイプだが、大きな乳房が特徴的なことから、おそらく牝の〈野人〉が人間の男性をさらっているところであろう（本編にそのような物語も収録されている）【図版8】。同書には挿絵はないため、この表紙が唯一

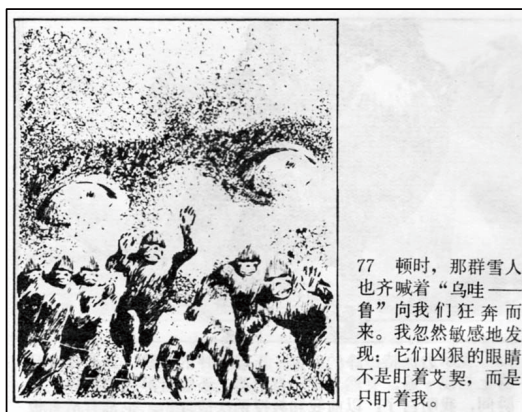
のイラストである。そしてこの場合も、胸は大胆に露出しながら、抱えている人間男性の頭部を股間部に重ねることで、視線を遮る形となっている。

このように、あるタイプの〈野人〉絵では、衣類こそ身につけていないものの、股間部分に何かを配置したり、陰にしたり、角度を工夫したりすることで、本来そこにあるべき大事な部分を描くことを、巧妙に回避しているといえよう⁸。

しかし、もちろんその剛毛さのおかげで股間を充分に隠しているタイプの〈野人〉作品も多い。

漫画『野人之謎』（科学愛好者叢書編纂委員会、四川科学技術出版社、1997）に登場する〈野人〉の親子はガタイの大きい類人猿型で、何も着ていない【図版9】。

擬人化された十二支の動物⁹たちが、〈野人〉を探して冒険する児童読み物『大力牛尋訪神秘踪跡——



【図版6】連環画『雪人之秘密』



【図版7】漫画「野人！？」



【図版8】『野人求偶記』表紙

野人与雪人之謎』(河南科学技術出版社、2004)は毛むくじらの類人猿【図版 10】として描かれている。

「野人迷踪」(楊鵬著／楊鵬工作室絵『神秘巨石陣・野人迷踪』、晨光出版社、2005)は、少年少女が地下世界へ迷い込むと、そこは〈野人〉と恐竜が暮らすロストワールドであった——という物語だ。〈野人〉たちは道具を作り、集団で生活して、住居も作るなどかなり進んだ文化を持っているようだが、毛むくじらのためか、衣類は必要なさそうである【図版 11】。



【図版 9】『野人之謎』



【図版 10】『野人与雪人之謎』



【図版 11】『野人迷踪』

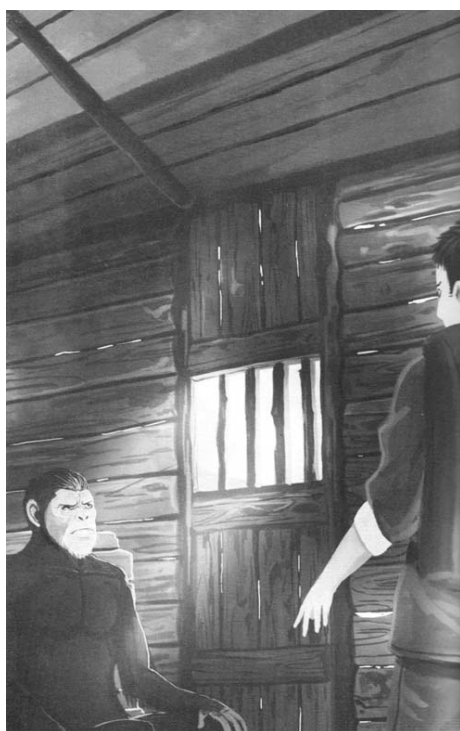


【図版 12】『遭遇神農架野人』

探検好きな4人の中学生が神農架を訪れる冒険小説『遭遇神農架野人』（彭緒洛著／火花動漫工作室絵、海洋出版社、2009）の挿絵に描かれた〈野人〉も、スラッとはしているが毛深い類人猿タイプで、何も穿いていない【図12】。ただ、弓矢を使いこなすなど、かなり知能は高いものと思われる。

神農架の〈野人〉は、実は太古に地球へ下り立った宇宙人の子孫だったとするSF小説『神農架的外星人猿』¹⁰（陸楊、湖南少年兒童出版社、2013）の挿絵に見える〈野人〉は、知能が高く言葉も話すのだが、唯一描かれた挿絵では椅子に座っているため、股間がよく見えない【図版13】。

神農架を探検する子供たちの物語を通じて、森の動植物の知識を楽しく学べるオールカラー知育漫画『野人迷踪・神農架原始森林探検』



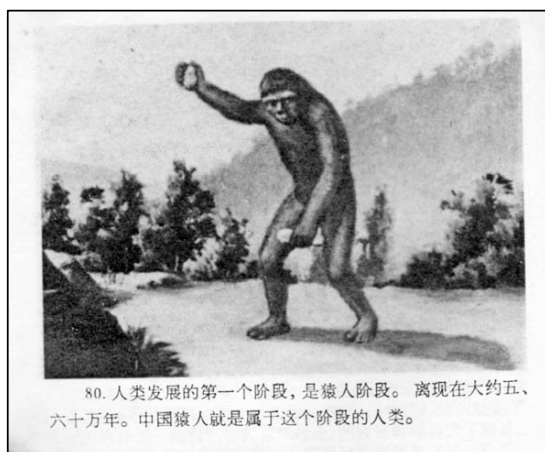
【図版 13】『神農架的外星人猿』



【図版 14】『野人迷踪・神農架原始森林探検』

（朱玉平編絵、江西美術出版社、2014）に登場する〈野人〉は、毛むくじゃらで何も身につけていないが、実はこれは主人公の少年の父親による変装である【図版 14】。本物の〈野人〉をおびき寄せるための作戦とのことだが、肝心の本物（？）の〈野人〉は最終ページに森の中を走るシルエットとして登場するのみで、その真の姿は不明のままである。

このように見てくると、穿いていない〈野人〉たちは、「そもそも剛毛であるため何かを穿く必要がない」、または「角度や遮蔽物の存在によって股間の描写を避けている」ということがわかる。後者の手法は、同時代の北京原人のイラストなどにもよく見られる。



【図版 15】中国原人像



【図版 16】同ジャワ原人像

科学教育を目的として作られた記録映画『中国猿人¹¹』（上海科学教育電影製作廠、1959）のフィルムをコマ焼きした同名連環画（中国科学院古脊椎動物研究所編、科学出版社、1972）の中国原人【図版 15】、ジャワ原人【図版 16】を見ると、それぞれ石器などの道具を持った腕が、見事なまでにちょうど股間部分と重なっている。さほど毛深くもない原人たちの場合、体毛ではカムフラージュしきれないため、かような方法が取られたものと思われる。これらの描写方法が、〈野人〉の場合にも用いられたといえるだろう。

そもそも中国〈野人〉騒動勃発の背景には、ちょうど当時化石発見から 50 周年を迎えて盛り上がっていた北京原人ブームが見え隠れしている¹²。〈野人〉の形象には、このような北京原人のイメージも色濃く反映されているのである。

穿いている〈野人〉たち～薄毛でも剛毛でも穿く理由

こうして見てくると、漫画や挿絵に描かれる〈野人〉は基本的に衣類をまとっていない印象も受ける。実際を目撃談でも、何か身につけていたと言及されることは極めて稀であるが、着衣の〈野人〉を描いた創作作品もかなり多く存在している。

比較的最近のものとしては、少年少女探検隊が活躍するオールカラー冒険漫画、『神農架野人捜尋記』（大連出版社、2011）に登場する〈野人〉たちは、毛むくじゃらにも関わらず、

腰巻きをつけている【図版 17】。剛毛ならば、わざわざ衣類で前を隠す必要はないはずなのに、これはどういうワケだろう？ ただのお飾りなのだろうか？ 大部分は葉で編んだものだが、中には貝殻で作ったと思しきものも確認できる。また、〈野人〉の統領にいたっては首飾りまでつけているものもいる【図版 18】。



【図版 17】『神農架野人搜尋記』



【図版 18】同、〈野人〉の統領

オールカラーの連環画『野人之謎（全集）』（郗仲平作、海嘯・善琨・蔚元画、中国三峡出版社、1996）は、中国の〈野人〉目撃談や各種調査をイラストで紹介する子供向けの絵本といった体裁だ¹³。同書に登場する〈野人〉はいずれも全身毛むくじらだが、何かの葉を編んで作ったと思われる腰巻きを身につけている【図版 19】。

実際、同書には腰巻きをつけた〈野人〉を見たと言っている、非常に稀なタイプの目撃報告¹⁴も収録されている【図版 20】。



【図版 19】『野人之謎（全集）』表紙



【図版 20】同書より、腰巻きをつけた〈野人〉の目撃談

1947年、人民解放軍の数名が神農架の山中で木の枝などで作られた謎の寝床を発見。そうこうするうちに、背の高い個体と低い個体、合計二体の〈野人〉と遭遇する。その描写はこうだ。

彼らは満身赤黒い毛に覆われていて、髪を振り乱しており、毛髪は淡い茶褐色だった。その背の高い方はメスで、木の葉で下半身を巻いて覆っているようだった。¹⁵

明確に「木の葉」の腰巻きについて言及があり、当然ながらそのまま連環画の中にも再現されている。女〈野人〉でも覆い隠すのは下半身のみ、というのはちょっと注意しておきたい。

このように、中には腰巻きへの言及のある目撃報告もあるが、その他、もともと衣類について言及のない目撃談であっても、同書ではほぼそのすべてに腰巻きを描いてしまっている。

1979年にサイズの違う三タイプの足跡が一度に発見された事件を伝えるコマでは、あたかもそれが〈野人〉家族のものであるかのように、パパ・ママ・娘を描いている【図版21】。いずれも腰巻きをつけているが、娘にいたっては、それがフレアスカート状になっているのが面白い。もちろんこれらは三種類の足跡だけを根拠にした想像図に過ぎず、衣類についてこのような目撃報告があったわけではない。

やはり子供向けの絵本ということで、ながしきの配慮があつての加筆ということも考えられそうではある。

また、同書でも紹介されているが、戦国時代の楚の詩人・屈原の『楚辞』「九歌・山鬼」に見える山鬼も、古代における〈野人〉として、関連書籍では引き合いに出されることが多い¹⁶。屈原の故郷（湖北省秭帰県）が、〈野人〉騒動の中心地である神農架に近いことも、両者を結びつけやすい要因のひとつとなっている。



【図版 21】〈野人〉の親子？



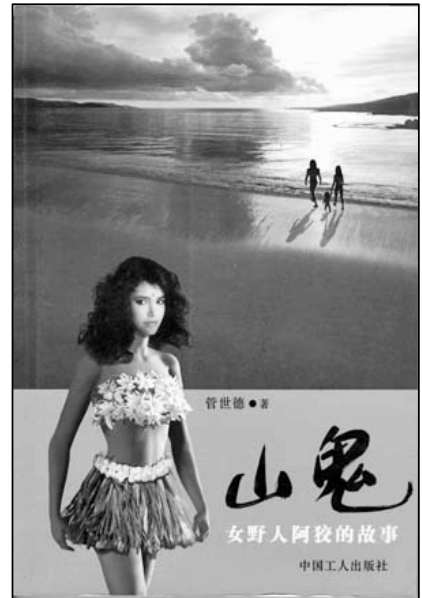
【図版 22】同書で描かれた山鬼の姿

山中に住む山鬼（ここでは女性とされる）について、屈原は、詩の冒頭で以下のように描写している。

人あるがごとし、山のくまに
薜荔べいれいを着て、女蘿じょらを帯とす¹⁷

「薜荔」とは蔦性の植物であり、「女蘿」は地衣類の植物である。山鬼とは、それらを身にまとった人のような姿であることがわかる。絵画等に描かれる山鬼は、その多くがやはり何らかの植物（木の葉？）状の腰巻らしきものをつけている。同書の紹介する山鬼も例外ではない【図版 22】。

女〈野人〉を主人公に、その半生と〈野人〉社会を描いた異色の長編小説『山鬼——女野人阿孜的故事』（管世徳、中国工人出版社、2003）には挿絵はないものの、表紙上部には海岸を歩く〈野人〉の親子らしき三人のシルエット、下部には腰巻をつけた女性の写真がコラージュされている【図版 23】。胸を花束で覆っているのも気になるが、これはあまり本文とは関係のないイメージである。ただ、山鬼と言え、腰を植物で覆った女性を思い浮かべるといふ伝統には沿っているといえよう。



【図版 23】小説『山鬼』表紙



【図版 24】『野人王国』より男性を介抱する〈野人〉



【図版 25】同じく、木の葉の腰巻き姿の〈野人〉

表紙に「中国版ターザン」との文字が躍る小説『野人王国』（蘇少輝・高飛著、中国文联出版社、2004）は、そのキャッチコピー通り、類人猿や原人ではなくより人間に近い姿で描かれている。同書には、口絵部分に5枚のイラストが掲載されており、人間の男性をさらって夫婦になる女〈野人〉は、上半身裸であることがわかる【図版 24】。別の絵では、下半身に木の葉の腰巻をつけていることもわかる【図版 25】。彼女は野人王国の住人で

あり、独自の言語も有していることから、同書における〈野人〉は、知られざる未開部族のようなイメージが強い。

このように、一口に山鬼といってもそのイメージもまた多様ではあるのだが、「植物で身を覆う」という要素に関しては、ほぼ何らかの形で反映されているようだ。伝説の山鬼の話が出たところで、中国古代の異人たちの形象を次に見てみよう。

古書の中の〈野人〉描写～「人」の記号としての腰巻き

かつての中国〈野人〉騒動において、その目撃談や報道などは一見、科学の衣をまといながらも、その実、古代からの神話・伝説から脈々と受け継がれてきた山の妖怪たちの姿や物語を換骨奪胎し、「未知の動物」という現代的なアイデンティティを与えたものであった¹⁸。現代の〈野人〉図像にも、古来より中国人が持ち続けてきた、それらのイメージが投影されているのである。

腰巻きについて言えば、明清代につけられた『山海経』の異人たちのイラストにも確認できる【図版 26】。木の葉状のものをはじめ、

獣の皮、布をまとったようなタイプなどが見られるが、『山海経』の場合、その多くは元のテキストには腰巻きの描写はない。すべては絵に起こした後世の人々の想像の産物である。

異国の民であれば、たいていはこのように下半身を隠すものが描かれるのだが、一方で、よく現代の〈野人〉の正体（先祖的存在）として関連書籍で取り上げられる「梟陽国」【図版 27】・「狢狢」【図版 28】等の場合、何も身につけずに描かれることの方が多い。これは単純に、その正体が「動物寄りか／人間寄りか」で判断しているとも考えられそうだ。



【図版 26】『山海経』（明 蔣応鑄）



【図版 27】『山海経』の梟陽国



【図版 28】同、狢狢



【図版 29】『三才図絵』の野人国

ちなみに、明の王圻『三才図絵』に描かれるその名もずばり「野人国」では、きちんと木の葉の腰巻きをつけている【図版 29】。長く垂れた乳房が特徴的であるが、文中にあるように、この瓜のように長い乳房の持ち主は男性である。木の葉の腰巻きについては文中には説明はないものの、おそらく実際の異民族イメージの反映があると思われる。

中国歴代の史書では異国のの人々の服飾表現として、腰巻きについて言及する記述がしばしば見られる。たとえば陳寿『三国志』「魏書」の「烏丸鮮卑東夷伝第三十」では、東夷の異民族である挹婁^{ゆうろう}の人々の説明として、「夏には裸で、わずかな布でその前後を隠し、それで身体を蔽^{おお}う」¹⁹という記述がある。「山林の間に住み、常に穴居する」²⁰とも書かれるなど、全体的に原始的な民のようではあるが、ここでは人間として扱われており、その衣類の存在は一種の文明指標になっている。

言い換えれば、文明を持った「人」と見なされさえすれば、元のテキストに記述はなくとも、「前を隠すもの」が図像の中につけ足されるのだ。ひいては、現代の創作に見える〈野人〉の形象においても、前を隠すためといった実用面ではなく、「限りなく人に近い」ことの記号として、そこに描き込まれているといえるだろう。それは、その時の作者（描く者）が、どのようなものとして〈野人〉を扱おうとしているかを判断する材料としても、ある程度有用であると考え²¹。

〈野人〉図像をそのまま（目撃談通りに）描いても、ともすればただの類人猿や原人・猿人の類と見分けがつかなくなる。そこで、見た目は動物でありながら、下半身にのみ「人」の象徴である腰巻きをつけることによって、その両義性を象徴することに成功したのが、このような創作作品に頻出する「腰巻きをつけた〈野人〉」たちなのかもしれない。

現実世界に現れた「半獣半人」の下半身

漫画や連環画とは離れるが、参考までにこれまで写真や映像に再現された〈野人〉（もしくは〈野人〉に類するとされた者）の形象を少し眺めてみることにする。

まずは、「実在」とするとされた「人間と〈野人〉とのハーフ」たちである。

中国の〈野人〉報道の中に、しばしばそのような情報が取り上げられることがあるが、それらは多くが眉唾物で、実際は小脳症や脳下垂体肥大症等、何らかの障害を持った人間である。しかし、その風貌や習性から、〈野人〉と結びつけて語られやすいのだ。

まさに「動物と人との境界線上の存在」である彼らは、果たしてどのような姿で我々の前に現れてきただろうか。

1970年代の中国〈野人〉騒動の最中に、人と〈野人〉の混血ではないかと噂される〈猴娃〉報道があった。そ



【図版 30】〈猴娃〉の写真

の第一報を報じる 1980 年 4 月 19 日の『文匯報』には、彼の写真も掲載されていた【図版 30】。ご覧の通り、全裸でしゃがんでいる（この体勢のため、大事なところは隠されている）。これは、記事中にある「彼は衣服を着ようとせず、家の者が衣服を着せても、すぐに引き裂いてしまい、冬でも同様で、寒さを恐れることはなかった²²」という記述とも一致する。体毛が生えているわけではないため、その姿は人間の裸体と何ら変わるものではない。彼は一種の病態であったというのが真相であるが、冬でも裸というのは事実だろうか？

1997 年には、やはり人と〈野人〉との混血児という触れ込みの〈雑交野人〉が、マスコミ——特に当時人気の出始めていたタブロイド紙などを通じて大きな話題になった²³。〈猴娃〉のケースと異なり、今回は静止画だけではなく動く映像も公開されたことで、その生々しさから受ける衝撃はいっそう大きなものとなった。



【図版 31】VCD 収録の〈雑交野人〉



【図版 32】同、バナナを食べる〈雑交野人〉

これは〈野人〉による村おこしを計画していた神農架が、そのPRも兼ねて作成した販売用VCD『中国“野人”探奇』（武汉大学音像出版社、1997）の目玉映像として収録したものである。この映像、実際にはアマチュアの〈野人〉研究家である王方辰が、1986年に撮影したものだ。この映像中の〈雑交野人〉も、やはり体毛はなく全裸。しかも、股間にはモザイクもボカシもなく、堂々と性器を露出している【図版 31】。連環画や漫画・挿絵などでは、その剛毛によって、あるいは原始的な腰巻きによって、はたまた絶妙なポーズによって巧みに隠されていたはずの部分が、実在する人物の極めてプライベートな部位にも関わらず、まったくの無修整で躍動しているのである（走る度に本当に激しくもんどり打っている）。

画面の奥からヒョコヒョコと奇妙な動きでカメラへ近づくと、それに合わせて〈雑交野人〉の股間もブラブラ揺れる。バストアップになると、今度はバナナを手にしてムシャムシャと頬張って見せる【図版 32】。これは撮影のための演出なのだろうか？ それとも本当に普段から服を何も着ていないのだろうか？

撮影者をはじめ複数の関係者に取材した香港誌『前哨』（明力有限公司、1999年1月号）掲載の記事「大陸的「雑交野人」之謎」²⁴では、その生前の逸話が収録されているが、そ

こには「兄弟たちによれば、外に一尺の雪が積もっていても、彼は威勢よくぴょんぴょん跳ね回ったという。厚い氷が張っても、服を着ることがなかった」²⁵とされている。事実かどうかはさておき、〈猴娃〉の場合と同様に、普段から全裸であったと噂されていたのは確かなようだ。ただ、映像中、〈雑交野人〉が食べたバナナは、どうやら撮影者の王方辰が持参して手渡したもののようである²⁶。その点は、作弄的なものを感じる²⁷。となると、裸についても疑わしさが残る。

王方辰によって『神農架野人初探』と名付けられたこの記録フィルムは、その後、野考会に保存されていたが、公開されたのはこの1997年が初めてではない²⁸。1990年代初めに、中国内のテレビ番組で、同名タイトルの番組が放送されている²⁹。その時、股間に修正が入ったかどうかは定かではない。

そして、この映像は日本のテレビ番組でも流用されていた。

日本での初放送がいつかは不明³⁰だが、未確認動物を扱ったドキュメンタリーや海外のオモシロ映像を紹介するバラエティ番組で、1990年代から2000年代はじめにかけて何度も取り上げられている。日本での放送について言えば、筆者は股間にボカシやモザイク処理をしたものしか見ていないが、初期の放送においては、どうやら股間は修正なしでそのまま放送されていたようなのだ。

それを裏づける証言がある。

漫画家さくらももこのエッセイ集『そういうふうになんかできている』（新潮社、1995）では、自身の妊娠中（1993年）の出来事として、テレビで〈雑交野人〉と思しき〈野人〉と人とのハーフの映像を見たことが告白されている。そこで彼女は、「日本人が珍棒などと呼ぶものが丸見えになっており」「そのダラリと垂れ下がった様が実に気持ちが悪い」と述懐し、吐き気までもよおしたことを告白している³¹。

では、同書に付けられた、さくらももこ自身による挿絵を見てみよう【図版 33】。正真正銘プロ漫画家が描いた本邦初³²の〈雑交野人〉イラストである。記憶に頼って描いているとのことで、正直あまり似てはいないが、体毛がない点などはきちんと再現されている。しかし、本文では克明に描写した肝心の「珍棒」だが、残念ながら「これ以上下は描けない。描いたら今でも吐きそう……」とのことで、省略されている。



【図版 33】さくらももこの描いた〈雑交野人〉

その後の放送ではモザイクやボカシ等の処理をされるようになったが、少なくともこの時点では、日本でもこのような状態で地上波電波に乗り、ゴールデンタイムのお茶の間に届けられていたことがわかる。

〈雑交野人〉は病態ではあるが、仮にもひとりの成人男性である。当時よく放送できたものだが、それは彼が「人間ではない何か」として扱われていたからにほかならないだろう。現在の日本では、おそらくもう無修正での放送は難しいものと思われる。

中国では、21 世紀に入ってから科学普及を名目としたミステリー検証番組が増えたが、そこで取り上げられる〈雑交野人〉の股間も、やはり修正が施されるようになっている。

1980 年代に撮影され、少なくとも放送される際には人間扱いされなかった彼は、21 世紀をまたぐ頃、ようやく「人として」前を隠してもらえるようになったということであろうか。

人と獣の間には……

連環画からは離れるが、現代中国の創作における〈野人〉像を、より様々な角度から見るという意味で、3 本の〈野人〉映画について最後に触れておきたい。

まずは、ロックバンド新褲子のボーカルである彭磊が撮ったインデペンデント映画『野人也有愛』³³ (2008) である。これは〈野人〉をテーマにした（かなりお下品な）喜劇で、冒頭では神農架でロケもおこなっている。主人公は、北京へ出稼ぎに旅立った恋人を追って湖北省の田舎から上京した男性。通販で購入した日本製の精力増強パンツを穿くと、突如全身に毛が生えて〈野人〉化（パンツや衣類は消滅）し、北京市街を無意味に疾走する【図版 34】という不思議なラストが印象的な怪作である。「人間がパンツを穿いたら〈野人〉になる」のは、何とも逆説的だ。〈野人〉の着ぐるみは、顔と手だけを出すタイプの簡単なものである。



【図版 34】『野人也有愛』より、天安門広場を駆ける〈野人〉

C G 技術を駆使し、「中国版アバター」との謳い文句で一般公開された映画『森林孤影』

(2014) は、公開前のポスターではシルエットのみで、「野人伝奇」の文字が躍っている【図版 35】。しかし、劇中に登場する〈野人〉は、子供の頃森ではぐれて野生化した女性という設定であり、どちらかといえば女ターザン物である。言葉は話せずに動物のような動きをするが、きちんと衣類を身につけている【図版 36】。れっきとした人間であるから、これは当然である。悪い密猟者たちは彼女を人間扱いせず、「〈野人〉を食べると健康にいい」との迷信を信じて彼女を殺して料理しようとまでするが、見た目が人間なのでその虐待シーンは非常に痛々しい。



【図版 35】『森林孤影』ポスター



【図版 36】主人公の女〈野人〉

中国の〈野人〉をテーマに神農架ロケを敢行した米中合作映画『Journey to Forbidden Valley』(2015) は、筆者はウェブで予告編映像しか見ていないが、毛むくじゃらの類人猿型〈野人〉が登場するようだ【図版 37】。完全に全身スーツを着用しており、当然腰巻きなどはつけていない。

このように、実写映像の形で見ると、その違いはわかりやすいかもしれない。すなわち、毛むくじゃらの全身スーツ（着ぐるみ）を着れば腰巻きは必要なく、生身の人間がそのまま演じれば何らかの衣類が必要となる。

ほぼ同じ時期に、まったく姿形が両極端の中国製〈野人〉映画が登場したというの



【図版 37】『Journey to Forbidden Valley』予告編

は、興味深いところである。かように異なっている、同じく〈野人〉として認識できるという点が、〈野人〉という言葉の持つ幅の大きさを物語っている。

＊

『旧約聖書』「創世記」によれば、アダムとイブは、ヘビ³⁴にそそのかされて禁断の果実を食べたことで、裸であることへの羞恥の心が生じ、イチジクの葉で局部を隠すようになったという。

一方で、ある意味「進化論の象徴」のような存在として現代中国に登場した（させられた？）〈野人〉は、そのような劇的な一瞬のキッカケを持たない。〈野人〉という概念は、動物から人間へと段階的に進んでいく、その長い時間の流れの中に点在しているからである。

創作作品に描かれた現代中国の〈野人〉像は、「謎の未確認動物」という統一された顔を持っているふりをしながらも、TPOに応じて、霊長類・北京原人・未開部族・野生化した人間といった側面を、それぞれ強調する。腰巻きの問題ひとつ取ってみてもわかるように、〈野人〉とは、獣と人との間を気ままに（もしくは自由に）行き来する、極めて曖昧な境界線上の存在なのかもしれない。

だからこそ、決して少なくない人々の想像力をかき立て、その創作意欲を刺激し続けてきたのだろう。

腰巻きの問題については、芸術や生物学での展示表現上の問題等、まだまだ考察すべき点が多いが、今後の課題としたい。

¹ 1970年代半ばから、中国湖北省の神農架林区で目撃報告が相次ぎ、国内外で大きな話題となった獣人型の未確認動物。中国版「雪男」。まことしやかにその実在が語られ、中国科学院が国家レベルの調査隊を送るなど、その研究には科学的な意義があると喧伝されたが、〈野人〉目撃談の多くは、古代からの山の妖怪の形象や物語に現代的解釈を加えた、いわば焼き直しがほとんどであった。当時の〈野人〉騒動の顛末と背景、中国における〈野人〉イメージの系譜については、拙著『中国「野人」騒動記』（大修館書店 あじあブックス、2002）参照。なお中国では、騒動の初期から〈野人〉はサルから人類に進化する過程の存在である「失われた輪（ミッシングリンク）」であるとの考え方が根強い。日本でもそれらの中国報道を受け、たとえば『朝日新聞』1980年1月4日付記事では、「人とサルの間？ “野人” という見出しで、〈野人〉を紹介している。

² もっとも、日本でもアニメにおける表現の自主規制が進んでいるのか、しんちゃん「ぞうさん」ギャグも、最近の放送ではほぼ見られなくなっている。

³ 「姿なき怪獣たちの肖像——描かれた〈野人〉の想像図を検証する——」（『饕餮』第12号、中国人文学会、2004、所収）等。

⁴ 初出は、劉民壯の論文「沿着奇異的脚印——鄂西北北山区“野人”考察」（『百科知識』1979年第2期所収）に掲載されたもの。

⁵ この劉民壯による〈野人〉像が、後に他の絵師によって模倣され、記号化していく過程については前掲拙稿「姿なき怪獣たちの肖像——描かれた〈野人〉の想像図を検証する

——」参照。

- ⁶ 初出は『少年科学』(1978)。
- ⁷ 拙稿「連環画の中の雪男——ふたつの『雪山魔笛』——」(『連環画研究』第3号、連環画研究会、2014、所収)。
- ⁸ このような手法は、たとえば日本のにつかつロマンポルノの映画等でも一時期多用されたものである。今回の連環画における〈野人〉の股間描写でも、似たような方法が用いられていることについては、本稿の回し読み段階で田村容子氏からいただいたご指摘に啓発されて得たところが大きい。心より感謝申し上げる。ご教示いただいたヤマシタトモコ『ドントクライ、ガール』(リブレ出版、2010)では、突如女子高生と同居することになった男性は、部屋では常に「裸族」(全裸で過ごす人)であるが、股間の動線上に障害(室内の物品)を設定し、決して彼女(読者も)の視界に股間が入らないようにすることで、笑いを生んでいる。ほかにテレビアニメでは、『新世紀エヴァンゲリオン』(1995)第2話「見知らぬ、天井」において、風呂から飛び出してきた全裸の主人公(碇シンジ)の股間が、テーブルの上に置かれた缶ビールと重なり、うまく隠されているシーンなどが同様の効果を生んでいる。さらにその缶ビールに別の人物(葛城ミサト)が手を伸ばし、あわやと思った次の瞬間、同じ位置に爪楊枝の缶も置かれていたことがわかり、視聴者はホッとしつつも笑う……という、二段階の構造となっているのである。
- ⁹ 牛が主人公の同書を含む「世界之謎探検故事叢書」シリーズ全12冊は、UFOやバミュンダー三角地帯、恐竜やピラミッドなどをそれぞれ扱い、それぞれ十二支の動物が主人公になっている。
- ¹⁰ 同書は、12~14才の5人の少年少女が主人公だが、日本人学者の「武田」のほか、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツの生物学者チームも、中国政府の許可を受けて神農架へ調査に訪れる。
- ¹¹ 中国語の「猿人」は「原人」を意味するが、ここでは原題のままとした。
- ¹² 中国科学院による神農架への〈野人〉調査隊の派遣時期(1976~80)は、1979年に化石発見50周年を迎え、徐々に盛り上がっていく北京原人ブームとほぼ時を同じくしている。1979年末には、北京原人化石発見50年の記念式典が開催され、周口店の北京原人展覧館が新装オープンしている。この時期の〈野人〉と北京原人に関連した様々な事象については、拙稿「怪獣とプロパガンダ——中国“野人”をめぐる言説に潜む政治と科学——」(『饕餮』第11号、2003年10月)、「一九八〇年の中国怪獣——改革開放初期のメディアと怪獣物語」(『横浜国大語研究』第30号、2012年3月所収)参照。
- ¹³ 同書の詳細については、拙稿「〈野人〉を夢見た男——連環画となった胡振林の物語」(『連環画研究』第1号、連環画研究会、2012)で紹介したので参照されたい。
- ¹⁴ 実は同書は、同じ中国三峡出版社の書籍『野人——来自神農架の報告』(杜永林編著、1995)の内容をそっくりそのまま、子供向けに連環画化したものであり、この目撃談も出典はそちらである。元の日撃談によれば、これは翟瑞生による証言で、〈野人〉については「背の高い方がメスで、ふたつの乳房は大きく、さらには木の葉で腰回りを巻いて覆っているようだった(高的那个是母的, 两个乳房很大, 好像还用树叶围着下身)」と描写されており、連環画では割愛された女〈野人〉の乳房への言及がある。ちなみに元の日撃報告では、もう一体の背の低い〈野人〉について性別はわからないとされ、腰巻きへの言及もない。
- ¹⁵ 同書60コマ目。原文は以下の通り。「它们满身是黑红色的地毛, 披头散发, 毛发是淡棕色的。那个高的是母的, 好像用树叶围着下身。」。
- ¹⁶ 先述の『神農架的外星人猿』も、第一章は「九歌・山鬼」と題し、その説明に充ててい

る。

- ¹⁷ 原文は以下の通り。「若有人兮山之阿，被薜荔兮帶女蘿」。
- ¹⁸ 詳細は、拙稿「中国人の“野人”イメージ——目撃報告と文学作品に現われた現代の妖怪——」（『饕餮』第9号、中国語学会、2001所収）参照。
- ¹⁹ 原文は以下の通り。「夏則裸袒，以尺布隱其前後，以蔽形體」。
- ²⁰ 原文は以下の通り。「處山林之間，常穴居」。
- ²¹ 本稿冒頭に挙げた『雪山魔笛』を原作とする二種類の連環画では、特にその描き方（腰巻きの有無）によって伝えたいテーマが変わっている。前掲拙稿「連環画の中の雪男——ふたつの『雪山魔笛』——」参照。
- ²² 原文は以下の通り。「他不要穿衣服，家里人给他穿上衣服，他就撕下来，冬天也这样，从不怕冷。」。
- ²³ 〈雑交野人〉と呼ばれたこの時の一連の騒動の背景や顛末については、前掲拙著『中国「野人」騒動記』を参照されたい。中国語の資料としては、税曉潔・冷智宏『尋找“野人”——神農架探秘紀実』（湖南文芸出版社、2002）の第九章「“雑交野人”及び“懸賞野人”騒動（“雑交野人”以及“懸賞野人”风波）」に詳しい。〈雑交野人〉事件については、最近では袁国映『野人』（新疆美術攝影出版社・新疆電子音像出版社、2012）でもその経緯を詳細に追っている。また、21世紀になってからは、中国の国営放送である中央電視台の科学番組で、〈雑交野人〉の追跡取材をおこない、その兄弟（彼らは健常者）へのインタビューもおこなっている。この時期の科学番組における〈野人〉騒動の検証については、拙稿「中国「怪獣文化」の研究——現代メディアの中で増殖する異形の動物たち——」（『北海学園大学学園論集』第141号、2009年9月所収）参照。
- ²⁴ 記事の署名は王荊。一連の騒動の内幕を探り、1997年12月におこなわれた〈雑交野人〉の遺骨のDNA鑑定結果についても詳細に報じている。〈雑交野人〉の全裸の全身写真（股間部も無修正）や、骨格の写真も掲載している。ここでは〈雑交野人〉の本名が「曾繁勝」であることも明らかにされている。
- ²⁵ 原文は以下の通り。「兄弟們說，就是外面下着一尺厚的雪，他也打着赤腳呼啦呼啦得跑。凍着滿厚的冰，他也不穿衣服。」。
- ²⁶ 袁国映『野人』（新疆美術攝影出版社・新疆電子音像出版社、2012）には、王方辰による〈雑交野人〉取材の際の様子が詳細に紹介されているが、その中に、そのような事実が記述されている。王方辰が「まるで初めてバナナを食べたかのように見えた」と述懐していることから、決して普段から好んでバナナを食べているわけではないことがわかる。
- ²⁷ 王方辰がわざわざバナナを持参し、彼に手渡した意図は不明で、もちろん本当に単なるお土産のつもりだった可能性もある。しかし、バナナはサルの好物というイメージから、人種差別的な意味合いを持つアイテムとして使われることがあるのも事実である。たとえばサッカーなどのスポーツ界などでは、しばしば白人が有色人種に対してバナナを投げつけるなどの行為が問題視されてきた。
- ²⁸ 1997年という時期にこの映像が再び脚光を浴びたのは、同フィルムを保管していた野考会代表の李建氏が1995年に亡くなり、その後、遺品整理をしていた娘の李愛萍によって映像が「再発見」されたことに始まる。観光地化を進める神農架が、1997年の「中国旅遊年」に合わせて、〈野人〉による町興し（関連本の出版・〈野人〉資料館の建設等）を李愛萍に依頼したが、このVCDの製作と販売はその一環であった。前述拙著『中国「野人」騒動記』参照。
- ²⁹ 1998年の筆者の留学当時、1970年代生まれの中国人の友人複数から「国営放送の中央

電視台で見た」との証言を得たが、詳しい放送年月日は不明。

- ³⁰ 現在確認できるもっとも早いものは、1991年9月3日放送のTBS「ギミア・ぶれいく」で、当時の番組紹介文に「太古の眠りから覚めついに出現・世界七不思議の中国“野人”の里に潜入」との文字が確認できる。その他、日本テレビ「世界まる見え！ テレビ特捜部」（放送期間 1990～）でも見たという証言がある。その後、筆者が確認したものとしては、1996年3月3日のテレビ朝日「スーパーサンデー『雪男大捜索』」等があるが、以降はいずれも股間にボカシを入れて放送していた。特に「スーパーサンデー～」では、冒頭で「神農架野人初探」の中国語タイトルも映し出され、「中国のテレビから」というテロップをつけていた。2005年6月11日放送のテレビ朝日「世界超常現象審議会® スクープ・サミット!!」では、日本の取材班が〈雑交野人〉（曾繁勝）の兄弟や、王方辰に現地取材をしているが、結局その正体についてはあやふやにしたまま終わっている（実は、筆者も事前に取材協力しているが、その真相についての考察はあまり活かしていただけなかった……）。
- ³¹ 同書 71 頁では、以下のように克明に描写している。「夫とTVを観ていると、“中国の山奥に住む野人”という生物が画面に映し出された。説明によれば、その野人とは人間と猿の混血であるという。（中略）ヒョロリとした背格好でニヤニヤ笑いながら小さな一軒家で“ひとり暮らし”をしているらしき彼は、半分人間なのだが半分は猿なので、パンツをはいていないわけである。それゆえ、日本人が珍棒などと呼んでいるものが丸見えになっており、その名の通り誠に珍しい棒が野人の体の中央のアクセサリになっているのだが、そのダラリと垂れ下がった様が実に気持ち悪い」。いくつかの事実誤認はあるが、〈雑交野人〉の映像であると考えられる。
- ³² 〈雑交野人〉を登場させた日本の漫画は、同作が初めてと思われるが、もちろん他の獣人型未確認動物に材を取った日本の漫画について言えば、それ以前から多く存在している。早い時期には、ヒマラヤの雪男を題材にした手塚治虫『0 マン』（『少年サンデー』1959～1960）などがある。特に 1970～80 年代は少年誌のオカルト特集、川口浩探検隊シリーズなど華やかかなりし頃は、単発ものも含めて未確認動物漫画も増えていった。諸星大二郎『逆立猿人』（週刊漫画アクション 3 月増刊『スーパー・フィクション・スペシャル』、双葉社、1981 所収）は、未知の猿人を発見するギャグマンガ。直立二足歩行ではなく、直立二手歩行（逆立ち歩き）するようになった猿人たちが登場する。頭が下で、股間（腰巻きをつけている）が上になる体勢で歩く。作中、調査隊の博士の推測として、逆立ちをすることで急所である股間が攻撃されやすくなり、そのせいで子孫を残しにくくなった種族ではないかと説明される。ちなみに今回は、諸星大二郎『ナンセンスギャグ漫画集 珍の巻』（ジャイブ、2010）に収録されたものを参照した。同作について情報をくださった竹内美帆氏には、心よりお礼申し上げる次第である。
- ³³ 映画『野人也有愛』の本編は 51 分。劇場公開はされなかったものの、同バンドの同名 CD アルバム（中国長城文化芸術中心、2008）付属の DVD にシークレット映像として収録されており、そこで視聴可能である。また、中国の各種動画サイトでも配信されている。
- ³⁴ ちなみに、中国の〈野人〉漫画や小説には、やたら森の大蛇・毒蛇との格闘場面が目立つ。楽園追放とはもちろん無関係であるが、興味深いところではある。